

なっている。大和朝廷の成立時の疫病から、奈良の大仏建立、時代が下っての江戸のはやり風邪、はしか、そして幕末のコレラと縦横無尽に日本の為政者と民のはやり病に対する記録を紹介している。そして中心の話題となっているのは100年前に世界的パンデミックとなったインフルエンザ（スペイン風邪）に対する、皇室、宰相、軍隊、軍艦、文学者、市井人、女学生らの記録や日記から出てくる社会的な問題である。磯田氏の語り口はデマンドサイドの医学史として、いかにサプライサイドとは別な医学史が存在するかを明らかにしてくれている。医学史をまなんでいる多くのものにとり、患者サイドの見方は副次的となってきたことは否めないところであるが、磯田氏の筆は、そのところを突き抜けて現代社会のありように対する直言を避けていない。日本の歴史学者の書として、非常に尊敬を以て読むことができた。

速水融氏の研究にあこがれて大学をかわってその薫陶を受けたという磯田氏にとり、感染症の世界的なパンデミックに遭遇した現在、この主題は最もやりがいのある仕事と見える。2020年9月日本に於いてはいわゆるコロナ禍は世界的な惨状からはやや避けられつつあるように見られた。しかしこの時期に本書でこの問題にデマンドサイドというよりも、日本の政治・行政・医療・社会に対する警告的に本書を出したことを本雑誌にて紹介しておきたい。

ちなみに速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（藤原書店2006年2月）によれば「世

界で第一次世界大戦の四倍（4000万人）の命を奪った」としている。その終章で総括・対策・教訓として「内地四十五万三千人外地二十八万七千人合計七十四万人の死者」「日本内地の総人口は減少せず」「流行終息後の第一次ベビーブーム」「なぜ忘却されたか」「人々はインフルエンザにどう対処したか」「謎だった病原体」とある。当時の世界人口は約十八億人程度と推計されている。

今回のコロナ禍においてはCOVID19の病原体は新型のコロナウイルスの出現であり、世界の通信、交通、情報網が発達し、そして有効な科学技術の共有もできていたはずである。そしてPCR検査による感染者の確認の拡大により感染者の数が把握できるようになり、その増加に歯止めがかからない。ワクチンの供給も始まろうとしている2020年12月であるが、世界人口約76億人における感染者数約8000万人、死亡者数約175万人、日本人口約1億2千万人における感染者数約21万人、死亡者数約3千人である。

本書が出版された2020年9月は世界における感染者数約3000万人、死亡者数約5万人、日本における感染者数約8万人、死亡者数約1500人であった。

本書評が掲載配本される頃にはこのパンデミックの終息が見通せることを期待したい。

（渡部 幹夫）

[文藝春秋，文春新書1279，〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23，TEL. 03 (3265) 1211，2020年9月，新書判，255頁，800円＋税]

橋本 明 著

『「治療の場所」の歴史——ベルギーの街ゲールと精神医療——』

1990年代初頭における東西冷戦の終焉と欧州連合の設立は、歴史学の潮流に大きな衝撃を与えた。すなわち一国史から、トランスナショナルな歴史を描き出そうとするグローバル・ヒストリーを生み出したのである。医学史研究もその影響を受け、国境を越えていく医学知識・医療制度の伝播とその受容について考察されてきた。このよう

な近年の歴史学の動向にふさわしい学術書こそ、橋本明氏の新著『「治療の場所」の歴史』である。本書では、グローバルの、とりわけ欧米先進地域の精神医療史の枠組みに依拠した、家庭看護に基づくゲール・システムの解釈が行われているのである。

タイトルに示されているように、本書は、患者

の治療およびケアをどこで行うのか、すなわち「治療の場所」に焦点が当てられている。近代の欧米や日本では「治療の場所」は精神医療の大きな関心事であった。最新式の精神病院をモデルに採用することが求められた一方、精神病院ではない別の形の治療・ケアへの注目があつたのである。本書では、19世紀後半の施設化に疲弊しはじめてきた欧米諸国や、施設化がすすまない日本において、導入をめくり議論されたゲールの精神科家庭看護システムが論じられている。

歴史学とは時間軸上における事象の考察の上に成り立つ学問であるが、本書もまた中世から現在までのゲール・システムの起源とその展開について取り上げられている。著者によれば、中世においてベルギーの小都市ゲールは精神病患者の巡礼地とみなされ、そこでは農家における患者の看護が行われ始めた。近世の17世紀を迎え、ゲールは巡礼地としての性格を弱めたが、その代わりに貧困精神病患者が大量にゲールの農家に預けられた。そして19世紀の近代医学の影響下において、ゲールの街にちらばる里親とそこに住む患者全体が、一つの精神医療施設、国立コロニーと位置づけられた。

精神病院患者の急増と病床不足に頭を悩ませていた20世紀初頭の欧米各国などにおいて、ゲールの家庭看護が注目された。ヨーロッパ、北米、中南米、アジアなどから見学者が多数、ゲールを訪ねたが、著者はゲールに残る「見学者名簿」の解説と分析を通じて、見学者の出身地を特定し、その上でドイツ、オーストリア、アメリカ、カナダ、英国植民地インドを事例として紹介している。ゲール見学者の主體的な動機が検討されることで、各国の精神医療とゲールとの関わりと時代におけるその変化が考察されている。

さらに著者は、「日本のゲール」といわれた京都の岩倉をめぐる議論を中心に、日本において家庭看護がどのように論じられたのかについて述べている。ゲールは近代の日本でもよく知られた存在であり、幾人かの日本人がゲールを見学していた。その中の一人東京帝国大学精神病学教室の呉秀三は1901年にゲールを訪問していたが、その

訪問前の1895年に『精神病学集要 後編』のなかで、ゲールと岩倉とを一括りにしていた。

だが、岩倉では数人から数十人の精神病患者が宿屋に下宿していたが、ゲールでは一人、二人の精神病患者が農家に暮らしていたに過ぎず、家庭看護を共通項として「ゲールと岩倉」とを一括りにすることには不可解な点がある、と著者は述べている。呉が、「ゲールと岩倉」とを括った1895年頃には、岩倉での「農家預かり」は既に衰退していた。橋本明氏は、呉が「ゲールと岩倉」とを一括りにするという着想をもった理由について次のように説明する。日本の精神医療の近代化を目指す呉は、ゲールのような近代的な家庭看護が岩倉で発展することを望み、岩倉の「農家預かり」をゲールの家庭看護と重ね合わせていたのではなからうかと。

第1次世界大戦は、ゲールだけでなくヨーロッパの家庭看護を衰退させた。ヨーロッパの家庭看護は、戦間期に一度回復するも、第2次世界大戦によって大打撃を受けた。第2次世界大戦後、ゲールでの家庭看護数は減少の一途を辿り、ゲールの精神科家庭看護システムへの国際的関心も薄れていった。だが、脱施設化が進む1960年代のアメリカでは、地域精神医療の文脈からゲールを評価する動きがでてきた。現在、5年に1度、ゲールのシンボルである精神病の守護神、聖ディンブナを讃える祭りがゲールで実施されており、ゲールの歴史と伝統が今でも継承されている、と著者は述べている。

グローバル・ノースでは、精神医療が、病院や施設での治療・ケアから、精神病患者の外来やクリニックの診療、さらには地域生活を支援するサービスへと変わって行くことが既定路線であるとの「共通認識」がある。だが著者は、本書の「おわりに」で、この既定路線に異議を唱え、治療の場所は、社会的なインフラやその業務を担う人材の質や量に左右されると述べている。グローバル・ノースであっても、どのような社会的な変化によって、精神医療のインフラが機能不全に陥り、安定的な人材供給が困難になるのかについて予測できないとの考えを示している。そして著者は、

「グローバル・ノースにおける治療の場所は地域」であるとの既定路線から過去を見つめるという「単純な歴史観」に警告を発している。

このように本書は、トランスナショナルな視点からゲールの精神科家庭看護システムの歴史について論じた優れた学術書である。ゲールに残る「見学者名簿」の解説と分析など、緻密な作業のもとに完成された歴史書である。だがグローバル時代の歴史学に求められる方向性を歴史叙述に反映させるならば、本書には検討すべき余地がある。それは、ドイツ、オーストリア、アメリカ、カナダ、英国植民地インドの家庭看護をめぐる精神医療の動向についてである。

アメリカを代表する歴史学者のリン・ハントは、『グローバル時代の歴史学』のなかで、グローバル・ヒストリーのあり方について次のように提言している。「グローバルゼーションがあまたの生活の側面に影響を与えている一方で、その影響は不均等なもので、ある場合は限定的である。……どう受容したのかは、地元の文化、地域経済、国家の政策によって異なるものとなる。それらの全てが、完全な歴史像を描くためには検討されなければならない主題なのである¹⁾」。

橋本明氏は、本書のなかで、1930年代、1940年代のアメリカのニューヨーク州など10州では、家庭看護の財政基盤を支える法整備が行われたと述

べている。だがアメリカの各州において、何がそのような事態をもたらしたのかについては説明し切れていない。ゲール・システムが、アメリカなど各国へ伝播されたことについては十分に理解できる。しかしリン・ハントが述べているように、どう受容したのかについては、各国の文化、経済、政策によって異なっており、本書においても、これら3要素の動向について十分に考慮される必要があったと思われる。

無論、各国の文化、経済、政策について検討しきることは単独作業では困難であり、協同作業がふさわしい。著者は、本書の「おわりに」で、精神医療の実施を左右する政治と歴史との問題を今後の研究課題としている。それならば、各国の精神医療政策における政治的主体を明らかにすることを通じて、著者が本研究をさらに深めることを願っている。

- 1) リン・ハント（長谷川貴彦訳）『グローバル時代の歴史学』東京：岩波書店、2016年（Lynn Hunt, *Writing History in the Global Era*, New York: W. W. Norton, 2014), p.10.

（大谷 誠）

[六花出版、〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-28 近藤ビル3F、TEL. 03 (3293) 8787、2020年11月、A5判、264頁、4,800円+税]

坂井建雄 著

『医学全史—西洋から東洋・日本まで』

1. 現在と過去との絶え間ない対話

新型コロナウイルス感染症は、医学史の重要性和必要性を私たちに教えてくれた。緊急事態宣言でステイ・ホームを余儀なくされた時期に、ペスト、コレラ、天然痘といったかつて世界的な流行を生じた感染症の物語が本屋で平積みになっていた。多くの注目を浴びたのは、1918年から1920年にかけて、ちょうど百年前に世界を席卷したスペイン風邪であった。

英国の外交官であり国際政治学者であるエド

ワード・ハレット・カーは、「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である」（『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波新書）と看破した。現在をよく理解するために、過去を研究する学問が存在する。そして、医学や医療が過去に実施したこと、あるいは実施できなかったことを明らかにすることにより、現在の医学だけでなく、将来の進むべき方向も示唆してくれる羅針盤を手にすることができる。

少なくとも、戦後の日本の医学の発展のなか